

## 日本人は何のために英語を勉強するのか

### はじめに

私は先日、7年前に卒業した長野県内の某公立中学校にて、教育実習を体験させていただく機会があった。そこで、本格的に英語を学び始めてまだ数ヶ月から3年目、となる中学生と交流し、英語を教えた3週間の中、そもそもなぜこのように英語を学ぶのだろうかという問題意識が芽生えた。今まで、教職に関わる専門知識は大学の机上でのみ学んできた私にとって、3週間生の生徒と触れ合う体験は、とても新鮮で、衝撃の連続であった。外国語を使う必要に迫られない、地方の中学生が死に物狂いで受験英語に立ち向かおうとする姿をみてから、「中学生のみならず、そもそも、私たち日本人は何のために英語を勉強するのか、日本人にとっての英語習得のゴールはどこに定められているのだろうか」と考え、今回、この授業での私のトピックに選んだ。少なくとも、実習中は、英語の点数が稼げず志望校の変更を真剣に考える生徒たちと触れ合う機会も多く、彼らを見ていると、私たち日本人の英語習得は何が目的で、ゴールは何なのだろう。という疑問が絶えなかったのである。大学生の中には、「6年間必死に英語を勉強したが、今は不規則動詞もよく思い出せない、でもまあ英語は特別必要じゃないから、まあいいか」という意見も良く聞く。大学受験のためだけの勉強なんて、ナンセンスすぎやしないか。では一体学習とは何なのか、という話にまでなる。そこで、私は、「受験英語」というものから開放された今、多様な背景をもった大学生が集うこのクラスの講座の仲間とのインターアクションを利用し、この問題を自分なりに解決したいと考えた。

今回の対話では、本授業の仲間一人(Aさん)と対話をし、2点のことに注意を払ってまとめた。①日本の英語教育の現状③実際の日本人の英語学習の動機付け(モチベーション)の2点である。

まず、日本の英語教育を他のアジア諸国の取り組みと比べることで、日本人の特徴的な英語、日本語に対する考え方が明らかになり、議論をしていて興味深かったので、これについてまず紹介したいと思う。また、対話者が、具体的なアジア諸国の取り組みについても紹介してくれた点も興味深かった。

次に、日本人の目的意識について話し合った。さまざまな教育機関や、学習指導要領で、英語学習の目標が提示されているが、現状としては、日本人は英語学習の先にどんな希望を見出そうとしているのか、自分の例も含め、話し合った。

これらAさんとの対話を土台に、他の授業の仲間にも英語学習のゴール(英語学習の動機付け)について、過去と現在を振り返っていただき、インタビューをし、そして気づいたことをまとめた。まず、Aさんとの対話の内容と、気づいたことについてまとめたい。

## 2 対話報告

*対話1：日本の英語教育の現状*

私：日本の英語教育の現状、というと、何を思い浮かべますか？

**Aさん**：受験英語への問題意識ですかね。たとえば、受験英語をもっとコミュニケーション重視にしようとかで、リスニングをセンターで課してみても、結局それが自分の目的で たとえば英語を使いこなしていこう！という感じではないんですよね。結局 外から押し付けられてやっているとこの感じがします。日本人には 意識改革が必要ですよね。学ぶ側だけでなく、教える側にも。

日本人は積極的にはやらないけどいつかできるようになればいいと思ってる感じがしませんか？

**私**：うーん、 そのとおりですね。でも、日本人の英語力に関しては素晴らしいものもたくさんあると思っています。たとえば、日本人には、確かな読解力、語彙力、アカデミックなコンテンツの文章でも読み取る力が優れていると思います。ただ流暢「らしく」英語を話せるだけで、ちやほやされる帰国子女は多くいますが、彼らの読解能力や語彙力は定かではありませんし。

**Aさん**：僕の帰国子女の友達もそう言ってました！

**私**：もし、日本でコミュニケーション能力育成を第一に考えて、教育していくとすれば、流暢な英語をそれとなく話す学生は増えていくと思います

一方で、必ずアカデミックなものを読む力、絶対的な語彙力、文法の分析能力は落ちる気がします

**Aさん**：なるほど、コミュニケーション英語とアカデミック英語のバランスですね。

**私**：今の風潮は、「コミュニケーション能力」に重きが向いていますが、日本人の優れた分析能力や語彙知識を保つことも考えてほしいです

**気づいたこと 「与えたものをこなさせる、という教える側の姿勢に問題があるのではないか？」**

自分たちの経験のもとに、日本の英語教育の現状を振り返ってみると、やはり学習者は英語を学習することを押し付けられてきた印象を強く抱いているとわかった。その証拠に、日本人は語彙力、読解力、文法分析能力といった、「与えられたものを分析し、理解する能力」には長けている。つまり、与えられたものをこなす、という作業の中では、そういった能力のみが身についた。しかし、英語は「ことば」である。理解だけでなく、コミュニケーションの道具として、もちろん産出する能力も必要はずだ。日本の英語教育では、この視点が欠けていたのではないかと、という結論に至った。今まで、与えられた英語を理解する力だけを極端に伸ばしてきたが、今の学習指導要領などには、しきりに「コミュニケーション能力の向上」がうたわれている。理解力と産出力、どちらかだけを重視するのではなく、そのバランスのとりに方をうまくやるのが、英語教育に携わる者に要求されるべきだろう。

日本人は、今まで、外から与えられたものを分析し、理解するために英語を勉強してきた、といえるかもしれない。それが、受験勉強やテスト勉強への高得点と結びつく、という原理のもとに、英語学習をしてきたのが大半の日本人ではないだろうか。では、実際の日本人のモチベーションはどうなっているだろうか。

*対話2：日本人のモチベーション*

**Aさん**：井上さんは、日本人がみな英語を習得できている状態が好ましいと思いますか？

私：習得の程度によりますが、はい、好ましいと思います。Aさんはどうですか？

Aさん：僕はどっちかという、必要な人が重点的にやればいかなと思っています。もちろん最低限の学習はみんなしたあとで、そこから必要な人に、重点的にやらせるというか。

私：なるほど

**Aさん**：たとえば台湾では、政府がエリート養成のための地区をつくって、そこで選抜された人たちが高等英語教育をうけているらしいです。英語にまったく関係なくても生活できる人は、情報弱者にならないラインで、最低限だけを習得してもらって、でも必要な人ががんばってやってもらってという感じで。

とりあえず、英語ができるとこんなに人生の幅がひろがるよっていうロールモデルがもっと出てきてもらえれば、と思います。すでに英語と全く関係ない生活を送るのは無理な世界だと思うので。だから、英語を使って自分を高めよう！それにはこんな使い方がありますよ、と。今は文章が読めても語彙をストックしても、しゃべれても、それを実際どう使っていいかわからない感じがあると思うので。

私：そうですね。そのとおりですね。東京にいると、留学生や外国人の友達と話すことが多いので、感覚が麻痺してしましますが、もともと地方出身なので、地方ではまだまだ英語を使うビジョンが曖昧だと思い出しました。

**Aさん**：そうですね。極端なことを言ってしまうえば。

私：はい

**Aさん**：まったく使う機会がないならロシア語でもいいのでは、ということになりはしないでしょうか。地方の小学生が学ぶという意味では…。使わない分数や物理の公式を忘れていくように、実際自分が生活している場面でどれだけ英語が必要なのかということも考えなければならぬと思います。

**気づいたこと「日本人には英語を使う機会が少なく、その状況がモチベーションを下げている」**

一つ前の対話では、「産出する力」も伸ばす必要がある、と結論付けたが、この対話では、「産出する力」が身についても、実際に産出する場面が日本にはないじゃないか、という対話になった。台湾など他のアジアの国の中で、英語を使えるようになるといかに豊かな人生になるかということを、積極的に国民に教えていこうという考えのもと取り組みを行っているところも多くある。日本は、学習指導要領を改訂したり、小学校の英語教育を導入するなどの政策を掲げてきた

日本語教育学研究  
書くこと・考えること  
最終レポート

が、そもそもなぜ日本は英語教育をもっと体系的に変えていくべきなのか、何のために勉強するのか、といったことを再度考える機会がいまだにない。中途半端な危機感のもと、なんとなく別のことを試みているようでは、負のループの中に陥るのではないかと感じた。

モチベーションをあげ、意欲的な勉強ができるためには、「使う機会」がなければならない。使うことで充実感や達成感をそのつど味わう場面がなくてはならない。英語ができるとういう点が豊かになる、と学習者は知っていたほうがいい。そういったことを、この対話を通して強く考えるようになった。

Aさんとの対話では主に、今の英語教育全体の問題点について話し合った。さまざまな問題が浮き彫りになることを通じて、日本人が、「何のために英語を勉強するか？」という疑問そのものが初級、中級（中学校、高校）の時点でもみ消されているような気がした。私たちはこれまで、幅の利かない学習を余儀なくされて、目的意識も伴わないために、根本的な疑問は置き去りにされたまま勉強を終えてしまってきたのではないだろうか。

最後に、BBS上での意見を紹介し、まとめて結論を導きたい。

回答してくださった皆さんには、「なんのために英語を勉強してきたか？そして、今はなんのために英語を勉強しているか？」という質問を投げかけている。

河村さんの回答：

高校受験、大学受験のときのわたしの英語の勉強は、みなさんもそうだと思いますが、「試験に合格するため」でした。もっと言うと、「第一志望の学校への合格に一步でも近づくため、少しでも多くの点数を取りたい」、それが英語学習のモチベーションでした。その結果、センター試験本番で198点を取り、第一志望の早稲田にも合格しました。面白いほど自分の目標を達成してしまったので、今となっては恥ずかしいですが、「自分英語デキるんじゃないの」みたいに勘違いしていました。

が、いざ大学に入ってみると、自分の英語力なんて大したことないことに気付きました。わたしは英語を見て、聞いて、何かの情報を「判断」することはできても、それを自分の内側から発することはできない、つまり、話したり書いたりできなかったことに気付いたのです。人間は他人とコミュニケーションを取るために言葉を使います。しかしわたしは言葉を、英語を「知って」はいても、「使う」ことはできない。まるで機械みたいだと思いました。

残念ながらそれがキッカケとなって「使える」英語学習を始めたわけでもないのですが…

いまは友達を作るために、友達と仲良くなるために英語を勉強しています。

わたしはロシアが好きなので、ネットで見つけたロシア人のペンパルとメールを交換しています。確かにロシア語も勉強していますが、ロシア語で意思疎通ができるほどの能力はありません。相手も日本語を勉強しているそうですが、レベルとしてはわたしと同じだと思われます。

日本語教育学研究  
書くこと・考えること  
最終レポート

だからもっぱら英語でメールをしています。  
内容は、自己紹介や趣味、最近あったこと、など。

以前は単語集や問題集を使った勉強でしたが、  
いまはメールを読んだり書いたり、いつのまにかそれが勉強になっている、という感じです。

先にも書いたとおり、以前の英語学習のゴールは「第一志望に合格すること」でした。  
しかし今の英語学習のゴールは存在しないように思います。  
ゴールがあるとすればそれは、日本語と同じように英語を使えるようになったとき、なのかもしれ  
ません。

#### 気づいたこと

自分は機械のようだった、まったく使う英語が身につけていないと痛感した、と過去の自分につ  
いて語ってくださったが、ここでもやはり、「日本にはそもそも英語を使う機会がない、達成感  
を味わえる場所がない」という対話2での問題意識が反映されている。学習者は「機械」になる  
つもりはなくとも、今の日本の英語教育の現状がそうさせてしまうのだ、と感じた。彼女は、自  
分で、大学入学後に「英語を使う場所」をみつけ、英語を自分のツールとして学ぶことができて  
いるだろう。しかし、それはすべての学習者ができることではないとも感じた。

近藤さんの回答：

- 小学校時代…外国人が家に来て教えてくれる時間が楽しかったから
- 中学時代…塾の先生に褒めてもらうため
- 高校時代…センター試験で高得点を取るため  
英語ができるとかっこいいと思っていたから  
将来役に立つと親に言われたから
- 大学時代…海外での活躍や留学を意識している人と知り合う機会が増えたため  
上京し、外国人を見る機会が増え、もっといろいろな人達とかかわりたいと思  
ったから  
海外旅行の際に困らないようにするため

こう見ると、大学時代に変化があったように思います。  
それまでは、「勉強」としての英語でした。  
しかし海外を意識する友人や外国人留学生を目の当たりにすることで、  
もっといろいろな人と知り合いたい。  
→世界共通語である英語を習得しなきゃ。  
となり、「コミュニケーションツール」としての英語を勉強するようになりました。

#### 気づいたこと

大学に入るまでと、大学に入った後の、彼自身の英語の捉え方は大きく変わっている。やはり、今の英語教育の元では、英語を「日本語と同じ、ことばの一つであって、コミュニケーションのツールなのだ」と理解し学習に励むことは相当難しいのだろう、ということがわかる。実際、高校生までは、点数や試験のことがどうしてもメインになってしまい、正確な分析力や暗記力の追求に走ってしまいやすいようだということがわかる。幸いにも早稲田大学には、英語を使う機会が多くあるし、大学生という世代になり、自分の世界を広げることで初めて英語をことばの一種と気づける人も多いはずだということがわかった。

#### 結論

今の日本の英語教育の現状と、学習者の学習動機付けに焦点をあわせて対話をしてみた結果、日本人には、英語でも日本語でも、何語でも、それは私たちの母語と変わらないことばの一種で、コミュニケーションのための道具なのだ、との認識が、少なくとも学習初期段階では感じにくいということがまずわかった。これは、帰国子女の自分としては新鮮で、衝撃的な見解であった。3名の対話者に共通していたのが、英語は「使うもの」なのだ、と認識した上で勉強をしているのは、大学入学後でのことだ、と回答してくれた。つまり、高校までは、テストのため、点数のため、いかに機械のようにミスなく正確に英語を分析できるか、それを問われてきたようである。

一方、英語を勉強する喜びを知ったのは、実際に使ってみて初めて感じる事ができるというのはどうやら確からしい。そして、それを知った上で勉強できるのは楽しいことであり、モチベーションだっただけである。しかしそれは、高校生までの段階で感じることは難しいようだ。

今は、日本人は一般的に、英語を「科目」としてとらえ、ゴールを点数や試験に定めている。それが本音で、それ以上でもそれ以下でもないだろう。加えて、できればもっと流暢に話せたらカッコいいな、という危機感にはかけるともいえる程度のモチベーションなのだろう。しかし、英語を使う機会を見つけたとき、使うことで達成感を味わったとき、英語によって人と交わったとき、英語は「科目」ではなく「ことば」に変わるようだ。こうなれば、「ゴール」なんてなくなる。よりよいコミュニケーションのために、いつまでも勉強し続けることができるようになる、というようである。

私たちは、英語を学ぶことにより、まず英語は「科目」ではなく「ことば」だということを知る。ことばを獲得することで、私たちは自分以外の誰かとインターアクションをすることができるようになる。そして、違う「ことば」を話す人は、自分と明らかに異なる文化を持つ場合が多い。その人たちとコミュニケーションをとればとるほど、最終的に自分自身に広がりをもてるのだ。私たちは、きっと、そのために英語を学ぶ。または、更に他の言葉、文化も学ぶことになる。今回のプロジェクトを通し、改めて実習校の生徒たちに、これを伝えたいと思った。

日本語教育学研究  
書くこと・考えること  
最終レポート

今回の対話では、大学に進学できた方々とはしか対話ができなかった。大学進学をしていない、あるいは高校進学をしていない人へ、学習動機やモチベーションをインタビューしたら、また面白い結果がでてくるだろう。

また、BBS 上で二人が意見してくれたように、やはりまだまだ機会そのものがないということも事実だ。日本が真に英語教育を改革したいのならば、高校生以下の学習者に、さまざまな英語を使う機会を提供することを考慮することが、抜本的な改革につながることは間違いがないようだ、と感じた。

終わりに

本授業「書くこと・考えること」では、自分もつ問題意識をクラスの仲間と共有し、議論し、それをレポートに反映させるという作業を主に行った。私が「書いて、考えて、書いて」という作業を行ったのは、まさにこのレポートを作成している瞬間だった。「英語を勉強するりゆう」ひとつを考えても、自分のバックグラウンド、自分の価値観、自分の意見がどうしても先に浮かぶ。それを他者に理解可能な形で画面上に著そうとする。しかし、仲間とのインターアクションは、先に進行する「自分の考え」を、あるときに歯止めをかけ、あるときにはサポートになり、またあるときには疑問視する、といった、さまざまな視点をレポートの中に盛り込むことができた。それだけ、私は書きながら考えることができた。普段のレポートやエッセイでは、いかに主観が先行しているかに気づかされ、たかが私個人の問題意識、研究分野であっても、必ず自分ではない他者とのインターアクションがレポートを深くすることが求められると感じた。そして、自分ひとりでは導き出せなかったさまざまな視点には、気づかされることが多く、優劣をつけられるものではない。

考えてみると、私はよく、自分の意見や問題意識を教授など目上の人に話す場合に、くだらないことを言っていないかどうか気にする。しかし、誰のどの意見や示唆にも、必ず自分を深め、考えを豊かにする手助けをする可能性が秘められていることに気がついた。だからこそ、私のもつ意見や考えにも、他人を同じように平等に自己評価していいのだ、と新たに悟った。

これから、私は自分の専門分野を更に深く学んでいくことになる。どんな状況があっても、自分がそれだけ専門家になっても、さまざまな人とのインターアクションを大切に、色々な意見に耳を傾け自分に吸収していきたく気持ちをも新たにしたい。